

明治期の鍵盤楽器の導入教育

～「神戸女学院音楽部レッスン帳」の古層(1900～1902)を考える～

津 上 智 実

**Organ Lessons in Meiji Period in the older part of Kobe College's
Music Lesson Notebook**

TSUGAMI Motomi

神戸女学院大学 音楽学部 音楽学科 教授

連絡先：津上智実 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学音楽学部音楽学科
ZAT03327@nifty.com

Summary

This paper examines the older part of Kobe College's Music Lesson Notebook. The Lesson Notebook records music lessons held from 1907 to 1923, but its older part retains lesson records from 1900 to 1902, given to three students.

The results are as follows. Music lessons were given once a week, six to twelve times per semester. They were constructed in three parts, namely, 1) Finger Exercises & Scales, 2) Studies & Pieces, and 3) Organ Harmony. The textbook used for 1) was *Technische Studien für das Pianofortespiel* of Louis Plaidy, for 2) Cornelius Gurlitt's Op. 82 or Op. 187, Ferdinand Beyer's *Vorschule im Klavierspiel*, Op. 101, Konrad Max Kunze's *Zwei Hundert Kleine Zweistimmige Kanons*, and others, but for 3) unknown.

Although all the three students, fourteen and eighteen years old, were beginners, they were trained from the beginning to transpose pieces into other keys, namely from C-Major to G, D, A, E, F and H flat. This seems to correspond to the necessity for them to accompany songs and hymns in an appropriate key for singers' register, which is said to be lower than today.

Their teacher was a graduate of Joshigakuin, named Yukiko TSUDA, who helped in the music education at Kobe College from January 1900 in the absence of the music teacher, Miss Elizabeth Torrey. A notice in the Lesson Notebook reads as follows: 'This record was made by Tsuda & Miss Torr[e]y is going to teach from [the] next lesson'.

In the main part of [the] Lesson Notebook, namely from 1907 to 1923, no one used Beyer's textbook. It may have been brought by TSUDA from Tokyo.

In any case the older part has only a few reminiscences, three out of about twenty. Therefore it is necessary to further examine the content of the main part of the Lesson Notebook to fully understand this important historical document.

Keywords: Meiji period, keyboard instruments, Kobe College, introductory education, lesson notebook

要 旨

本論は、本学所蔵の「神戸女学院音楽部レッスン帳」の古層（1900～1902）を検討することによって、明治期における鍵盤楽器の導入教育の具体例を明らかにする。この「レッスン帳」は1907年から1923年までのレッスン記録であるが、切り残された古層部分に、1900年から1902年までの3人のレッスン記録が残されている。これを検討した結果、次の考察を得た。

レッスンは週1回が基本で、1年3学期の各学期に6回から12回実施された。

レッスン内容は、（1）「指の訓練と音階」、（2）「練習曲と楽曲」、（3）「オルガン和声」の3分野で構成されている。

教材は、上記（1）では一貫して『ブレディ』、（2）では『グルリット』、『バイエル』と『カノン』、その他が用いられたが、次第に『バイエル』への依存度が高まっていった。（3）の教材は不明である。

生徒（14歳1人と18歳2人）はいずれも初学者であるが、移調奏を盛んに行ない、最初の学期でシャープ4つのホ長調に至るまでの移調奏を学び終えている。これは讃美歌の伴奏を歌いやすい音域で弾けるようになるための基礎訓練だったと考えられる。

指導は音楽教師の津田幸子で、アメリカ帰休中の専任教師エリザベス・タレーの留守を助け、その帰任に備えて記録を作成したことが「レッスン帳」の書込みから知られる。「レッスン帳」第2期（1907～1923）では『バイエル』が全く使われていないので、これは女子学院卒業の津田幸子が東京から持込んだレッスン文化であった可能性もある。

生徒の1人は、在学中に日曜学校の活動に参加し、卒業後は宣教師の手伝いをしてきた。そうした場で役立てるために楽器演奏のレッスンを受けていたのであろう。

今後は「レッスン帳」第2期（1907～1923）の内容を精査し、大正期の鍵盤教育の実態を解明することによって、さらに理解を深めていきたい。

キーワード：明治期、鍵盤楽器、神戸女学院、導入教育、レッスン帳

1) 目的

本論は、明治期の音楽教育の実態解明の一助として、本学所蔵の「神戸女学院音楽部レッスン帳」の古層（1900～1902）を検討することによって、鍵盤楽器の導入教育の具体例を明らかにすると共に、それがどのような意味を持つのかを考察することを目的とする。

ここで「神戸女学院音楽部レッスン帳」（以後、「レッスン帳」と略記）と称しているのは、表紙に「音楽部 学生名簿・成績簿 1907(明40)-1923(大23)」と記された大判（22.5 cm × 34.5 cm）のノートのことで、その概要については別稿で論じた¹。すなわち、この「レッスン帳」は、1907年から1923年までの17年間に及ぶ音楽部におけるレッスンの詳細な記録であり、明治・大正期におけるミッション・スクールの音楽教育の実態を示す貴重な史料である。しかるに、その記載の順序は一見順不同に見えるほど複雑な構成を示すが、このノートの使用が第1期（1900～1902）と第2期（1907～1923）の2層から成ると考えることによって、その古層（第1期使用分）の大半が切り取られ、現在残っているのはその極一部（3カ所のみ）であり、その上で改めて第2期に巻頭から使用されたことを明らかにすることができた。

本論においては、この古層（第1期使用分）に焦点を絞って、その内容と意義とを考察する。

2) 「レッスン帳」の古層に見るレッスンの実態

「レッスン帳」の古層（第1期、1900～1902）に当たるのは、次の3ヶ所である。

4～5頁：Nishikawa Miho（西川美保）（1900年秋学期、1901年冬学期）

31頁：Akahori Tama（赤堀玉）（1900年秋学期）

1 津上智実「神戸女学院音楽部レッスン帳（1907～1923）の資料的価値とその内実」『神戸女学院大学論集』第57巻第2号（2010年12月）、141-153頁。

125～126頁：Itsue Nagami（永見五枝）（1901年春学期、同秋学期、1902年冬学期）

この3ヶ所に見る3人の学生のレッスン記録を、附録「『レッスン帳』」の古層（1900～1902）に見る毎週のレッスン記録」（以後、「レッスン記録」と略記）として本論の末尾に掲げる。アメリカ婦人伝道団から派遣された女性宣教師によって創設された神戸女学院²においては、名簿は現在に至るまでアルファベット順で作成されており、この「レッスン帳」も英語で記録されている。

この「レッスン記録」から、以下のことが読み取れる。

まず、レッスンは基本的に週1回で、1学期に6回から12回実施されている。初学者の場合には、スタート時に週の半ばで追加レッスンが1回行なわれている。

レッスン内容は、（1）「指の訓練と音階 Finger Exercises & Scales」、（2）「練習曲と楽曲 Studies & Pieces」、（3）「オルガン和声 Organ Harmony」の3分野で構成され、これに（4）「備考 Remarks」欄が付されている。

教材は、（1）「指の訓練と音階」では一貫して『プレディ Plaidy』が用いられている。（2）「練習曲と楽曲」では『グルリット Gurlitt』、『バイエル Beyer³』と『カノン Canon』が用いられている。他に「変奏 3～10 Var. III-X」、「新しい『アダージョ』 New “Adagio”」、「リーフレット Leaflet」の記載もあるが、これらが具体的に何を指すのかは不明である。（3）「オルガン和声」については、具体的な教材名は挙げられていない。一ヶ所だけ『クーラック Kullak』が挙げられているが、これもどの曲集を指すのかは不明である。教材については別項で改めて論じる。

「レッスン記録」を見て最も注目されるのは、レッスンの初期から移調奏をさせていることである。

2 1875年創設。神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史』（神戸女学院、1982）参照。

3 「レッスン帳」では一貫して「Beyers」と誤記されている。

例えば、赤堀玉（31頁掲載）はまったくの初心者だったらしく、初回レッスン時（1900年9月18日）には「最初のレッスン」および「演奏に向けての準備」、備考欄には「彼女は指が固いが、何とか直そうとしている」と記されている。曲集に入るのは翌週（9月25日）からで、『プレディ』の1番から14番までと『グルリット』の1番から5番までを弾いているが、この時すでに後者は原調のハ長調に加えてト長調でも演奏させている。次のレッスン（9月28日）では『プレディ』の16番から18番までをト長調で、『グルリット』の4番から10番までをト長調とニ長調で弾かせている。続く第4回のレッスン（10月2日）では『プレディ』の21番から41番までをニ長調で、『グルリット』の11番から20番までをニ長調とイ長調で弾かせている。このように第2回でシャープ1個、第3回でシャープ2個、第4回でシャープ3個までの調に移調して弾くという形で、組織的に進めていることが見て取れる。第9回のレッスン（11月7日）では『プレディ』の（おそらくは第3部の）9番をホ長調で弾かせており、シャープ4個までの調を学ばせている。

同様に、西川美保（4～5頁掲載）のレッスンでも、第2回の備考欄に「各調の名前を覚えるのが非常に遅い」とあり、開始は遅かったものの、第4回レッスン（10月25日）でト長調、第7回（11月16日）でニ長調、第8回（11月22日）でイ長調、第9回（11月29日）でホ長調と、最終的にシャープ4つまでの調を最初の学期で学ばせている。次の学期（1901年冬学期）には第5回のレッスン（2月14日）でヘ長調、第8回（3月7日）で変口長調と、フラット2つの調まで進んでいる。

永見五枝（125～126頁掲載）の場合には、備考欄の最初に「この定期的なレッスンの前に数回、予備的なレッスンを受けた」と記されているが、初回レッスン（5月24日）で「ドレミファソファミレド」をハ長調とト長調で、『バイエル』の12番から14番までをハ長調とニ長調で弾かせている。永見の場合にも、最初の学期でシャープ4つのホ長調まで進み、さらにフラット1つのヘ長調でも弾かせている。

こうした移調奏の徹底した訓練は、おそらくは実的な必要に迫られてのこ

とだったと思われる。西川の場合も、赤堀の場合も、最初の学期の後半ではイ長調での演奏が目立つ。教則本は通例ハ長調で書かれているから、これは原調から短3度下の調に移調して弾くことを意味する。これは当時の女学生たちの声域が現在よりも短3度低かったという説に適合するものである⁴。学内外で実際に讃美歌の伴奏を弾く際、人々の歌いやすい音程に移調して弾くことが一般に求められたとすれば、そのための能力を培うことが目指されるのは当然のことであったと理解される。

3) 使用楽器の問題

ところで、これらのレッスンはオルガンで行なわれたのであろうか？それともピアノで行なわれたのであろうか？「レッスン帳」の第2期（1907～1923）については、大抵の場合に「Organ」ないしは「Piano」の記入があるので問題ないが、第1期に関しては楽器名の記入がないので、推測する他ない。

当時の楽器の状況を考えてみると、神戸女学院では1879年6月にオルガンの必要性が訴えられ⁵、1881年2月までに2台保有していた⁶ことが、当時の宣教師文書によって知られる。また、ピアノも1889年1月以前に1台あり⁷、1890年1月にはスタインウェイ社製のスクエア・ピアノが届いたことが知られている⁸。その後、1894年に音楽館が完成し、1896年に音楽の専任教員としてエリザベス・タレー Elizabeth Torrey（1848～1921、在職1896～1909）を迎えたこ

4 中村健「Church Sambika 考—明治期の神戸女学院の女学生は皆コントラルト？」、神戸女学院大学『新撰讃美歌』研究会編『「新撰讃美歌」研究』（新教出版社、1999）157-191頁。

5 1879年6月14日付、クラークソン書簡、第150号。神戸女学院大学史料室『学院史料』第1号（1983）71頁。

6 1881年2月8日付、クラークソン書簡、第348号。『同』第4号（1986）50-51頁。

7 1889年1月11日付、ブラウン書簡、第289号。『同』第9号（1991）49頁。

8 この楽器は今に伝わっており、現在はエミリー・ブラウン館のめじらウンジに置かれている。製造番号4444（1860年製造）。間口2メートル、奥行98センチ、高さ95センチ。82鍵、6+3/4オクターヴ（C～a^{'''}）で、象牙、つげ、黒檀が用いられている。

とを勘案すると、オルガンでもピアノでもレッスンは可能な状態であったと思われる。

そこで、もう一つの手掛かりとして、第2期の生徒たちの楽器選択の流れを参照してみよう。「表1：『レッスン帳』第2期（1907～1923）に見るレッスン開始時の楽器選択」は「レッスン帳」の記載を筆者がまとめたものであるが、これを見ると、明治期（1911年以前）には大半の生徒（13人）がオルガンを選んでおり、ピアノのみという生徒は1907年（小倉末）、1909年（森本縫）、1910年（上坂みつ）の3名しかいない。大正期（1912年以降）に入ると、ピアノのみの生徒が増えていくが、それでも両方ないしはオルガンのみの履修者もまだ一定数（12人）残っている。このような流れを見ると、第1期（1900～1902）の生徒たちはピアノよりもオルガンでレッスンを受けていた可能性が高いと考えられる。

表1：「レッスン帳」第2期（1907～1923）に見るレッスン開始時の楽器選択

年	オルガンのみ	始めオルガン、 後にピアノも	最初からオルガン とピアノ	ピアノのみ
1907			5人	1人（小倉末）
1908	1人	1人		
1909	1人	1人		1人（森本縫）
1910	3人			1人（上坂みつ）
1911	1人			
1912				2人
1913				1人
1914	1人		1人	5人
1915	1人		2人	7人
1916	2人		1人	
1917	1人		1人	5人
1918				1人
1919			1人	3人
1920				5人
1921				3人
1922	1人			2人
1923				1人

4) 教材

教材としては、まず(1)「指の訓練と音階」として『プレディ』が全員に対して用いられている。これは、ルイ・プレディ Louis Plaidy (1810-1874)⁹の『ピアノ演奏のための技術教本 *Technische Studien für das Pianofortespiel*』であると考えられる。この教本は日本語版が出ているが¹⁰、曲番号が付け替えられているため、この「レッスン記録」を理解するためにはペータース版等を参照する必要がある。

次に、(2)「練習曲と楽曲」としては、『グルリット』、『バイエル』と『カノン集』の3種が用いられている。この内、『グルリット』はコルネリウス・グルリット Cornelius Gurlitt (1820-1901)¹¹の『若いピアノ奏者のための最初の手引き *Die Ersten Schritte des Jungen Klavierspielers*』(作品82)、ないし『初歩者のための小練習曲 *Kleine Melodische Etuden für Anfänger im Klavierspiel*』(作品187)のいずれかと考えられる。後者は日本語版が出ている¹²。

『バイエル』は、言わずと知れたフェルディナンド・バイエル Ferdinand Beyer (1803-1863)の有名な『ピアノ教本 *Vorschule im Klavierspiel*』(作品

9 L. プレディについてはMGGでも *Grove On Line* でも立項されていない。だが、プレディはライプツィヒ音楽院のピアノ教授だったので、グリーグ Edvard Grieg (1843-1907)の最初のピアノ教師としてグリーグの項で言及されている。もっともグリーグはチェルニー、クーラウ、クレメンティを用いたプレディの衛学的なレッスンを嫌って別のピアノ教師に移ったというエピソード付きである。John Horton/Nils Grinde: 'Grieg, Edvard' in *Grove On Line*. (2014-10-20 アクセス)

10 『プレディー、ピアノ教本』(訳注:平尾妙子、全音楽譜出版社、1977)

11 C. グルリットについて、*Grove On Line* は立項がないが、MGGにはある。Ute Schwab: 'Cornelius Gurlitt', *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Personenteil, Bd. 8, Bärenreiter, 2002, 294-295. グルリットは多作家で作品228までを数える。最も功績があったのはピアノのための教育用作品で、ドイツはもとよりイギリスの出版社からも求めがあったという。

12 『グルリット、初歩者のための小練習曲』(全音楽譜出版社、1973)

101)¹³である。

『カノン』は、コンラード・マックス・クンツェ Konrad Max Kunze (1812-1875) の『200の短い2声のカノン集 *Two Hundred Short Two-Part Canons, Not Exceeding the Compass of a Fifth For the Beginner on the Piano*』(作品14) と考えられる。これは「レッスン帳」第2期の第63頁に「Kunze: 200 2-Part Canons」という書込みがあるのを手掛かりにしている。このカノン集は、クンツェの死後にハンス・フォン・ビューローの手によってまずはドイツで出版された¹⁴ものだが、1896年にはニューヨークのシャーマー社から英語版が出されており、楽器や楽譜の多くがアメリカから女学院に送られた背景を考えると、おそらくはこの英語版でレッスンが行なわれたと推測される。内容は、4小節 (Nos. 2, 3, 4) と8小節 (Nos. 1, 5, 6, 7) の短い2声のカノンで、これを右手と左手で弾き分けるようになっている。

ところで、以上3つの教本の使い方は、生徒3人でそれぞれ異なっている。それを編年順にまとめてみたのが、次の「表2：『練習曲と楽曲』の教材一覧」である。

これを見ると明らかなように、1900年秋学期に赤堀のレッスンを『グルリット』で始めたものの、10月から11月にかけて教材が定まらず、最終的には「リーフレット」を使用している。この「リーフレット」がどのようなものかは不明であるが、「レッスン帳」第2期の第51頁に「Kobe Leaflet」という記載があるところから、自校で作成したオリジナルの教材であろうと思われる。

教材が揺れていた時期 (1900年10月) にレッスンを開始した西川に対しては、

-
- 13 F. バイエルについて、MGGには立項がないが、*Grove On Line*には立項されており、「日本と韓国でとりわけ有名」とある。近年、安田寛『バイエルの謎：日本文化になったピアノ教則本』(音楽之友社、2012)も出された。
- 14 クンツェはミュンヘンで活躍し、バイエルン国歌(‘Gott mit dir, du Land der Bayern’)の作曲者として知られる。『200の短い2声のカノン集 200 kleine 2st. Kanons』は、『実用ピアノ教本』(1840)の補遺として、ハンス・フォン・ビューローによって死後出版された。Johannes Timmermann: ‘Konrad Max Kunze’, *MGG*, Bd. 10, (2003), 862-863.

表2：「練習曲と楽曲」の教材一覧

年	月	Akahori	Nishikawa	Nagami
1900	9	Gurlitt	—	—
	10	Gurlitt Var. III-X New “Adagio” Leaflet	—	—
	11	Gurlitt New “Adagio” Leaflet	Beyer	—
1901	2	—	Beyer Canon	—
1901	5	—	—	Beyer
1902	3	—	—	Beyer

『バイエル』が用いられ、途中から『カノン』が加えられている。翌年5月にレッスンを始めた永見の場合には、「レッスン帳」の項目名が通常の「練習曲と楽曲」の代わりに「バイエル Beyers [sic]」と明記してあるところから、『バイエル』を用いることが最初から確定していたと思われる。

このように、1900年11月から1902年3月にかけて、『バイエル』への依存度が高まっていった様子が見て取られる。

5) 指導者

この3人の指導に当たったのは、専任のタレーではなく、津田幸子という教師である。これは、「レッスン帳」31頁の赤堀玉の「レッスン記録」の最後に、「この記録は津田によって作られ、次のレッスンからはタレー先生が教えることになっている This record was made by Tsuda & Miss Torry [sic] is going to teach from [the] next lesson」と明記されているところから明らかである。上述の前稿ですでに指摘したように、これはアメリカでの一時帰休(1898~1900)を終えて1900年10月1日に神戸に帰任したエリザベス・タレー¹⁵

15 1898年7月13日にアメリカに帰省し(『めぐみ』第18号、1898年8月5日号、6頁)、1900年10月1日に帰院した。「ミス、タレー 十月一日帰院従前の通音楽科担当」

への引き継ぎを考えて、このノートが書かれ始めたことを示唆している。古層の他の2カ所（4～5頁目と125～126頁目）の筆跡も31頁目のものと同じであり、同じく津田によって書かれたと判断される。

津田幸子は、『めぐみ』第23号（1900年3月号）によれば、女子学院の卒業生^{15a}で、1900年1月24日に神戸女学院に来任し、教師として音楽科の指導に当たった¹⁶。『学院史料』第21号掲載の「音楽教師一覧表」¹⁷によれば、津田幸子の在任期間は1900年1月から1901年12月までとされているが、「レッスン帳」の筆跡を見る限り、1902年3月まで永見のレッスンを担当していたように思われる。

その後、1902年4月2日に「神戸に於て松本岩太郎氏と」結婚し¹⁸、翌年春までに熊本に転居したことが、『めぐみ』第31号（1903年4月）に「熊本市新屋敷町三九八（津田）松本ゆき」（4頁）とあることから知られる。

タレーのアメリカ帰休は最初1年の予定であったが、結局2年余りに延びた。『めぐみ』第21号（1899年8月22日）は、「ミス、タレーは米国クリフトン、スプリング保養院にて保養中の由多分九月迄に帰院は覚束なし」と告げている（14頁）。そこで音楽教師として助力を求められた津田幸子は、タレーの帰任（1900年10月）後も、結婚（1902年4月）の少し前まで、引き続きレッスンを担当していたのではないだろうか。

第5代院長として知られるシャーロット・デフォレスト Charlotte Burgis DeForest（1879～1973）も、「かつて1年間、音楽科を担当した」と自ら書き記しているが¹⁹、「レッスン帳」を見ると、多年にわたって多くの生徒にレッ

（『めぐみ』第25号、1900年12月号、14頁）とある。

15a 女子学院資料室の梶原恵理子氏によれば、明治32（1899）年3月卒業である。

16 「[一月]二十四日 津田幸子（女子学院卒業）来任音楽科を助る」（『めぐみ』第23号、1900年3月号、2頁）。

17 長谷川千彰、富岡ひとみ「音楽教師一覧表」、神戸女学院史料室『学院史料』第21号、2006年12月、13～17頁。

18 『めぐみ』第29号、1902年6月号、3頁。

19 神戸新聞学芸部編『わが心の自叙伝』2（1968）、196頁。

スンをしていたことが明らかである。津田幸子の場合も、これと類似の例と考えられるのではないだろうか。

6) 生徒たち

『ブレディ』や『バイエル』を固い指で苦勞しながら学んでいた生徒たちは、一体どの位の年齢で、どのような人だったのだろうか？

本学に残る「生徒名簿、甲、明治45年7月調」は、3人について次のように記載している。

赤堀タマ：神戸花隈町481番地、浪穂長女

明治15年6月生、入学明治29年11月

西川美保：岐阜県美濃国海津郡高須村142番、士族、文彦妹

明治15年8月21日生、入学明治33年9月17日、退学明治36年3月

松尾二改ム、台湾台中郵便電信局官舎

永見五枝：神戸市今出在家町3丁目45番屋敷、士族、永見吉明三女

明治20年2月生、入学明治34年4月、卒業39年3月、高入、退39年5月

ここから、赤堀玉は明治15（1882）年6月生なのでレッスン開始時（1900年9月）に18歳、西川美保は明治15（1882）年8月生なのでレッスン開始時（1900年10月）に同じく18歳、永見五枝は明治20（1887）年2月生なのでレッスン開始時（1901年5月）に14歳であったことが分かる。今の感覚からすれば14歳でも遅く、ましてや18歳からの稽古では、その苦勞は並大抵ではなかったろうと想像される。

この内、赤堀玉は神戸女学院が1899年に再開した日曜学校に関わっていたことが、『めぐみ』第19号（1899年1月25日）の次の記事から知られる。すなわち、「茲に又日曜学校を開くこととなれり昨今同校に働かるる姉妹はミセスジョン

ソン柴田雪子奥野郁子米津君子赤堀玉子の諸姉なり」(7頁、下線引用者)とある。翌年1月発行の同誌第22号でも「今此校に力を尽さる方はミス、ジャンソン柴田雪子安倍高野子横溝芳野子津村敏子赤堀玉子の諸姉なり」(12頁、下線引用者)と報じられている²⁰。赤堀がレッスンを受け始めたのは、この年の秋からである。日曜学校での活動を通じて、楽器演奏の必要性に目覚め、上述のように固い指に苦勞しながらも、熱心に稽古を続けたものであろう。最後のレッスン(11月27日)の備考欄に、「常に誠実な少女であった She has been a faithful girl.」と記されていることが、その様子を物語ってくれる。

この3人の卒業後について、同窓会である神戸女学院めぐみ会事務局、および神戸女学院大学図書館学院史料室に問い合わせたところ、次の回答を得た。

氏名	卒業年度	備考
三井(旧姓、赤堀)たま	女19	結婚前に広島で宣教師ブローカー氏の手伝い ²¹ 夫は官吏で台湾に赴任
松尾(旧姓、西川)美保	(女22)	夫は官吏で台湾に赴任
伊津野(旧姓、永見)いつゑ	女23	夫は会社員

これを見ると、赤堀は卒業後も、広島で宣教師の手伝いをする中で、オルガン演奏に携わっていたのではないだろうか。後年、三井(赤堀)たまが『めぐみ』第62号(1973年)掲載の「大先輩からのことば」欄に寄稿した文章によれば、「気分が悪い時は女学院で覚えた聖句の暗誦や讃美歌を口ずさんで慰められています。『寝たきりとなりたる老女折々に 讃美歌うたう調子はずれて』とは隣室の娘婿の詠歌です」(60頁)という²²。多感な女学生時代に身につけた音楽の力が、生涯にわたって一人の女性を支え続けた様子が窺える。

20 この記事の存在を、史料室の佐伯裕加恵氏にご教示頂いたことを記して感謝する。

21 『めぐみ』第30号(1902年12月)の2頁と5頁に記事がある。これも佐伯裕加恵氏にご教示頂いた。

22 この文章の存在を、めぐみ会事務局の中川玲子氏にご教示頂いたことを記して感謝する。

7) まとめと課題

以上、「レッスン帳」の古層（1900～1902）に残された3人の「レッスン記録」を考察してきた。用いられた教材から見て、この3人はいずれも初学者で、音階の基礎練習からレッスンを開始している。開始年齢の遅さ（14歳と18歳）から、苦勞の多いものであったろう。だが最初期から移調奏を盛んに行ない、3人共、最初の学期でシャープ4つのホ長調に至るまでの移調奏を学び終えている。これは歌や讃美歌の伴奏を歌いやすい音域で弾けるようになるための基礎訓練だったと考えられる。

教材は『プレディ』を基本に、『グルリット』や『バイエル』、『カノン集』が用いられたが、次第に『バイエル』への依存度が高まっていく様子が見て取れた。「レッスン帳」第2期（1907～1923）では『バイエル』が全く使われていないので²³、これはむしろ女子学院卒業の津田幸子が東京から持込んだレッスン文化であったという可能性も考えられる。

いずれにしても、「レッスン帳」の古層に残されたレッスン記録はわずか3人分であり、切り取られてしまった恐らくは17人分相当のレッスン記録は取り返しがつかない。

今後、「レッスン帳」第2期（1907～1923）のレッスン内容を精査して、大正期の鍵盤教育の実態を解明することによって、この古層に残された明治期のレッスン記録の持つ意味も逆照射されて、さらに明らかになっていくであろう。

謝辞：本研究は、神戸女学院大学大学研究所の2014年度総合研究助成によって支えられていることを記して感謝する。

23 「レッスン帳」第2期（1907～1923）については別稿で改めて論じる予定である。

附録：「音楽部レッスン帳」の古暦（1900～1902年）に見る毎週のレッスン記録

Nishikawa Miho (pp. 4-5)

Fall Term 1900

Date	Finger Exercises & Scales	Studies & Pieces	Organ Harmony	Remarks
10/11	Plaidy, No. 1-12		Reading	
10/16	Plaidy, 12-25		Reading	She is very slow in learning names of the keys.
10/18	id., 17-41		Reading	
10/25	id., Sec. 3 No. 2 in G		1-12	
11/1	id., No. 4 in G		13-22 in G & D	
11/8	id., No. 5		Same	
11/16	id., No. 7 in D	Beyers[sic], 12-13 in G & D		
11/22	id., No. 8 in A	id., 14-16 in C, G, D & A		
11/29	id., No. 9 in E	id., 17-20 in D & A		
12/6	id., No. 10 in A	Same	Review 1 st Step	
12/13	—			On account of her own ill health she was excused.

Winter Term 1901

1/17	Plaidy, No. 11 in D	Beyers[sic], 21-25 A & E	General Review	
1/24	id., No. 12	id., 26-27		
1/31	The Day of Prayer			
2/7	id., 13 in D	id., 28-29 in E, F, G & A	Nos. 12-13	
2/14	id, 14 in F	Canon 1 Beyers[sic], 30-32 in F, A & D	No. 14	
2/21	id, 15 in A	Canon 1 & 5 Beyers[sic], 36-38 in E & F		

2/28	id, 16 in E	Canon 5 in D, F & G Beyers[sic], 39-41 in F & A	No. 17	
3/7	id, 17 in B	Canon 6 Beyers[sic], 45 & 46 in E & B	Nos. 23-24 in E, F & A	
3/14	id, 18-19 in E	Canon 7 Beyers[sic], 48-51	Kullak, No. 1	
3/21	National Holiday			She was very slow in learning but lately she made good beginning.

Akahori Tama (p. 31)

Fall Term 1900

Date	Finger Exercises & Scales	Studies & Pieces	Organ Harmony	Remarks
9/18	First Lesson	(Preparation for playing)		Her fingers are stiff yet she is trying hard to correct.
9/25	Plaidy, 1-14	Gurlitt, 1-5 in C & G		
9/28	id., 16-18 in G	id., 4-10 in G & D		
10/2	id., 21-41 in D	id., 11-20 in D & A		
10/9	id, No. 4 in G	id., 21-24 in Same Key	Reading	
10/16	id, No. 5	Var. III-X	Reading & 1-13	
10/23	id, No. 7 in D	R., Var. III-X New "Adagio"	Nos. 14-22	
10/30	id, No. 8 in A	Gurlitt, 4-11	Nos. 23-24	
11/7	id, No. 9 in E	Gurlitt, 12-16	No. 25	
11/13	id, No. 9 in E	Leaflet, 1-3	No. 25 & 26	
11/20	id., No. 10 in A	id., R. 1-3 New 4-7	No. 26	
11/27	id., No. 11 in A	Rev. 7 New 8-12	No. 26	She has been a faithful girl.
				This record was made by Tsuda & Miss Torr[ely] is going to teach from [the] next lesson.

Nagami Itsue (pp. 125-126)

Spring Term 1901

Date	Finger Exercises	Beyers [sic]		Remarks
5/24	drmfsmrd in C & G	12-14 in C & D		She had a few preparatory lessons before this regular one.
5/27	dmrfmsfrd Same Keys	Rev. 14 14-19 in Same Keys		
5/30	Same in D & F	18-20 in D	Explanation of D. C., D. S., Fine, Kwadrami & Duain	
6/5	dfrsmd in E	21-25 in A		
6/13	“	26-27 in F		
6/19	General Reviews			

Fall Term 1901

9/13	Plaidy, No. 1 C & D	30-36 in G & D		
9/20	No. 2 in C	37-39 in D & A		
9/27	No. 4 in G	40-45 in E		
10/4	No. 5 in F	Same		
10/10	6 & 7 in G	46-48 in F & D		
10/17	National Holiday			
10/24	Plaidy, 9-10 in D	Rev. 46 & 47		
11/1	Undokwai			
11/7	Plaidy, Same	Same in F & A		
11/15	Plaidy, 11 in A	48-49 in A & E		
11/22	13 in E	50-52		
11/29	15 in E	Rev. 51 & 52 Take 53-54		
12/6	15 in F	Same		
12/13	16 in F	General Review		Her progress is slow but hopeful.

Winter Term 1902

1/16	18 in F	55-57 in G & D.		
1/23	Day of Prayer			
1/31	Plaidy, 18 in D. Say all the notes. Play slowly. Lift the fingers.	55 in G. Book hands alike upper & lower lines.		Right hand is not in good shape. Always say the notes aloud.
2/7	She missed the lesson on account of cold.			
2/14	Plaidy, 19 in G	57 & 55 in D Take 58 in D		
2/20	Plaidy 21 in D Again she missed a lesson with cold.	57 again, take 59 and 60		
3/13	Plaidy No. 22 in D	Take 60 & 61 in all keys.		
3/21	National Holiday			
3/28	Examinations			She is beginning to understand but she is not sure of the black keys.